

この子らと共に

一日々の取組の中で

編集者

伊丹市特別支援教育研究会

発行者

伊丹市教育委員会

「特別支援教育に携わるすべての皆様に感謝を込めて」

伊丹市教育委員会事務局

学校教育部 廣重 久美子

特別支援教育が本格的に始まって十七年が経とうとしています。

全国において、直近十年間で小中学校段階の児童生徒数が一割減少する中で、特別支援学級に在籍する児童生徒数は二・一倍、通級による指導を受けている児童生徒数は二・三倍となっており、伊丹市においても、それぞれ約二・四倍、約四・三倍という状況です。

増加の要因の一つには、社会の特別支援教育への理解が深まったことが考えられます。保護者の皆様におかれましては、さまざまな教育情報等をもとに早い時期に子どもへの困りに気づき、早期に相談したり療育を始められたりするなど、将来の自立に向けて取り組んでおられることと存じます。学校においては、学校長のリーダーシップのもと、特別支援教育コーディネーターを中心とした校内体制の構築が推進されてきました。伊丹市の特別支援教育について、各

校や各場面では個別の課題がありながらも、体制が整っている、理解が進んでいるなどのお声をいただくことがあります。これは、これまで特別支援教育に携わられた先輩方や、改訂を重ねてきた基本方針「今後の特別支援教育のあり方」に基づき各校において温かく適切な支援に努めておられる先生方、さらには、サポートファイル等をもとに熱心に学校と合意形成を図っておられる保護者の皆様のご努力のおかげです。さまざまな立場から特別支援教育の推進のために力を尽くしてくださる方がいたからこそ、支援を必要としている子ども達に適切な支援が届き、特別支援教育の充実が図られてきたと感じています。

市教委事務局の立場にいますと、いろいろな考え方やご意見をお伺いすることがあります。交流及び共同学習の大切さとそのあり方、通級による指導のあり方、学校と特別な支援を要する児童生徒や保護者との合意形成のあり方、放課後等デイサービス等関係機関との連携のあり方などについてです。さまざまな立場の方のお話をお伺いしたり、共に方向性を話し合っ

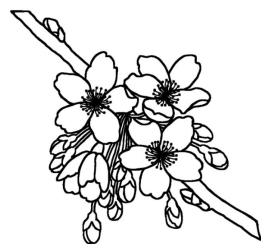
たりする中で気づいたことは、特別支援教育に関わりのある方はみな、子ども達の学びのさらなる充実のため心を尽くしておられるということです。保護者も学校も市教委事務局も関係機関も、同じ方向を見ていることを確認しながら互いの理解を深めることによって必ずより良い状況を生み出せることを身をもって感じてきました。

特別支援教育は特別なことではありません。障害の有無に関わらず、子どもの様子から教育的ニーズを把握すること、より充実した教育とは何かを本人と保護者と学校が共に考えることから始まりま

す。これらは、かつての勤務校で先輩の先生方の言葉や行動や背中

で教えていただいたことです。このことが、私が今、市教委事務局で特別支援教育に関わる上での土台となっています。

伊丹市の特別支援教育は今後も社会の状況や児童生徒の実態に沿って、皆様と連携し、常により良い形を目指します。伊丹市のすべての子ども達が目標に向かって成長できるよう努めてまいりますので、今後とも、ご理解ご協力よろしくお願いします。



「明日もきつといい日になる」

伊丹市立天神川小学校

教諭 徳本 大典

今年度伊丹市立天神川小学校の特別支援学級は、一年生六名、二年生八名、三年生四名、四年生九名、五年生九名、六年生十四名、計五十名の児童が在籍しています。種別も学年も異なる全ての児童が、共通して日々取り組んでいることを三つ紹介します。

まず、認知機能トレーニング・コグトレです。学習面・社会面・身体面の三方面から包括的に子どもたちを支援するという特徴があります。その中でも、六年前から学習面の認知機能強化トレーニングに取り組んでいます。例えば、漢字が苦手な児童には短期記憶の認知機能トレーニング・コグトレ、ADHD傾向の児童は行動抑制の

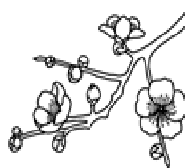
コグトレを継続的に取り組むなど、児童の実態に合ったものを選んでいきます。

次に、五年前から取り組んでいる本校オリジナルの体幹体操です。体幹を鍛えることで、姿勢が整い、集中して学習に向かうことができます。継続して取り組むことで力のコントロールや、不器用さの改善など、様々な効果が得られています。特別支援学級のみで取り組んでいた体幹体操ですが、全教室で取り組めるように、低学年・高学年・座ったバージョンなどを増やすことで、今では、学校全体でも取り組むようになっています。

最後に、いつでもすぐに支援を必要とする児童のもとに駆けつけられる体制づくりです。その方法として特別支援学級担任・加配・介助員計十一名全員が学校配付のトランシーバーを持っています。児童の情報共有がスムーズになり、必須のアイテムとなっています。これらの取組や環境づくりに、みんなで取り組むことで教師も児童も、過ごしやすくなりました。今日まで続けてきた取組がつかって、「明日もきつといい日になる」と私たちは願っています。

【参考文献】

○宮口幸治 宮口英樹 編著「不器用な子どもたちへの認知作業トレーニング」(三輪書店) 2014
○宮口幸治 著「子どもの認知能力をグングン伸ばす! マンガコグトレ入門」(小学館) 2022



『できた!』の経験を

伊丹市立笹原小学校

教諭 岡本 裕美

本校の特別支援学級は、肢体不自由・知的・自閉情緒学級合わせて七学級あり、四十三名の児童が在籍しています。今年度より特別支援学級の担任として子どもたちと関わっています。

私が初めて特別支援教育についての知識を深めたいと思ったのは、育児休業中でした。たくさん子どもたちと関わり、教師のやりがいを感じ、小さな自信が芽生え始めていたところに、息子を出産しました。子どもが好きでこの仕事を

選んだにも関わらず、息子の成長の過程で発達の凸凹や育てにくさを感じるものがたくさんあり、それにうまく対応できずに怒ってばかりの自分自身にショックを受けたのがきっかけでした。「このまま学校現場に戻っても、一人ひとりの子どもに寄り添うことはできない。特性に応じた支援をできるようにならないと教師は続けられない。」と思い、育休中に少しずつ勉強を始めました。

今年度は、自閉情緒学級で三、五年生の七名を担当していますが、子どもたちの有する困り感や困難さは様々です。自分の考える支援が適切なのか悩み、考え続ける毎日ですが、子どもたちの「できた!」という笑顔からパワーをもらっています。

クラスで手紙係になった三年生毎日、手紙ボックスから手紙を運ぶ仕事です。外で遊びたいという気持ち強く休み時間に手紙を取りに行くことが難しかったので、係のメンバーと相談し、昼休みが終わって掃除までの時間に取りに行くことになりました。それでも最初のうちは嫌がったり、忘れていたり……。手をつないで連れ

ていくことも度々ありました。手紙ボックスまで行っても、自分のクラスがわからないということもあつたので「目印シール作戦」をとることにしました。しかし、同じ係の子が声をかけてくれるとスムーズに行けるようになったので、今度は「友達と一緒に作戦」に変更しました。そつと後ろからついて行き、見守る日々が続きました。ある日、昼休みに私がつけず、掃除時間になってから教室へ行くと「先生、こっち！」と手を引っ張られました。連れられて行くと、机の上にたくさんの手紙が置かれていました。「自分で行けたの？」と聞くと、「一人で行った！」と笑顔。どうやら係の他の子も行くのを忘れていたようで、「ありがとう。助かったよ。一人で行けたのすこいね。」と友達にも喜んでもらえて誇らしげな様子。すると、手紙係以外のクラスメイトも口々に「ありがとう。」「すこいね。」と声をかけてくれ本当にうれしそうでした。その日をきっかけに、毎日忘れることなく一人で係の仕事をこなせるようになったのです。友達に「認められた」という経験は大きな自信になりました。

特別支援学級の子どもたちは、どうしても周りから手を差し伸べられることが多くながちですが、今回のような経験を積み重ねることが、自己肯定感を高めることにつながります。「これはできない」ではなく「どうやったら一緒にできるか」を考えながら、今後も子どもたちに寄り添っていききたいと思います。



『特別支援学級の生徒たちと関わって』今思ふこと
伊丹市立荒牧中学校

教諭 浦田 宜達

わたしは現在、担任として特別支援学級の生徒と過ごすとともに保健体育の授業を数時間担当して日々過ごしています。

昨年度までは、主に車椅子で生活する肢体不自由の生徒二人と二年間過ごし、今年度から自閉・情

緒学級の生徒数人と過ごしています。

特別支援学級の生徒は、「絵を描くのがうまい」「複雑なパズルが得意」「ある特定の暗記力がすごい」など、他の人より秀でたところがあります。

ただ、自分に興味・関心のないものは話を聞こうとしないといった一面もあります。人間誰にでも当てはまることですが、得手、不得手があるものです。

わたしが思うには、現代の生徒たちは言葉だけでは伝わりにくいことが多いです。聴覚や視覚それぞれの実態に応じて指導することが必要不可欠だと思います。わたしなりの表現をするならば、「体で話す」ということです。

また、形にはめこまず、個々の特性を見抜き、毎日粘り強く接していくことが大事だと感じています。

これからも生徒たちと一緒に過ごすとともに、わたし自身も高めていきたいです。



「生徒の自信につながる指導」

県立こやの里特別支援学校

教諭 石上 麻哉

学校生活を送る中で、楽しいことや難しいこと等様々なことがあります。中には、すぐに解決できる些細な出来事だとしても不安を感じ、調子を崩してその後の活動もおぼつかなくなる生徒がいます。私自身「授業で発表があつて嫌だな」「式典でトイレに行きたくなつたらどうしよう」等日々不安を抱えて学校生活を送っていたことをふと思ひ出すことがあります。今となつてはなんてことないことでも、当時は、とても大きな不安を感じていました。

日々の関わりの中で、生徒が不安を感じるのには、対処方法がわからない時が多いと感じます。そのため、生徒たちと対話しながら生徒自身が理解し納得して行動できるように日頃から何気ないことや勉強のことなど色々な話をするのを心がけています。目の前の課題に困っている生徒に「どうしたの?」と聞くと言葉を絞り出して一生懸命伝えようとしてくれます。対話を通して少しずつ一緒に課題

を整理し、行動の後押しをすると「こう言えばよかったのか!」「こうすればよかったんだね!」と気持ちいい、自ら行動できることが増えていきます。成功体験を重ねると「先生、私はこうしたいのです、どう思いますか?」など自分から相談することも増えていきました。この経験を繰り返すことで、特定の教師だけでなく、友だちにも相談することができ、自信をもつて行動できることが目に見えて増えてきたように感じます。

教師が先に「こうすればよかったんじゃない?」と課題の対処方法を伝えてしまうこともあったのですが、それでは生徒は考えることなく言われたことをしているだけで生徒自身の力にはなっておらず、また同じ課題につまずきます。生徒の困っていることを真摯に受け止め、対話し問いかけることで生徒自身も考え、自分なりの答えを出し納得することで次に進むことができるのだと体感しました。これからも、生徒一人ひとりと向き合い、対話しながら生徒の自信につながる指導をしていきたいと思っています。



『自分らしく』を引き継ぐ

伊丹市立伊丹特別支援学校

教諭 大高 寛子

今年度、進路担当となり、多くの方と出会う機会をいただいています。本校における進路担当の役割は、学校教育と社会人への入口をつなぐことであり、福祉や企業との連携が大事です。

本校では、高等部卒業後の進路について、早い段階から検討していくために、進路説明会や進路先の見学会を小学部や中学部の保護者にも呼びかけて実施しています。高等部卒業後の日々を具体的にイメージし、どのような進路先を希望し決定していくのか。進路選択において大切にすべきことは、

「本人の希望」であり、『自分らしく生きる自分らしく働く』を叶える出発点になるのかを見極めることです。「本人の希望を正しくキヤッチすることも、正しい選択であるか見極めることも簡単ではありませんが、妥協はできません。まず第一に「本人」からの発信を受け止め、次に「本人をよく知る人たち」とよく話すことを心掛けています。何が好きでどんなとき

に幸せを感じるのか。「良さ」や「自分らしさ」とは何か。授業の他、見学や実習の場で見せる本人の「いい顔」等の表情は、何より正しい答えになります。また、家族をはじめ、福祉や医療等のサポートチームの方々の声を聞くことも重要だと実感しています。

本校の児童生徒は家族や家族以外の多くの皆さんの支援の輪の中で日常生活を送っています。

学校は、平日の登校から下校まで、児童生徒と日々向き合っています。積み重ねてきた学習の質も量も大きな価値があります。しかし、学校は一日の大半の時間帯のようで、実は、日々のごく一部でしかありません。

朝や放課後、休日、春夏秋冬の長期の休み期間中は、家族や福祉事業所、訪問看護や病院等、多くの人々によつて毎日の生活がサポートされています。児童生徒や家族の日常を知り、身近に関わる人から教わることは、進路担当として学びとなっています。

これまで伸ばし育まれてきた「良さ」や「自分らしさ」のままに、一歩先のライフステージに引き継ぐ進路を目指したいです。